武士と騎士の死についての違い

"A difference about the death of a samurai and theknight."

1K06B249　　若松　弘樹

指導教員　主査　寒川　恒夫 先生　　副査　太田　章 先生

序論

「死」とは、すべての人間にやがて必ず訪れるものである。我々はその現実をどのように見つめればよいのだろうか。私は水球というスポーツで全日本代表になり、何度か海外遠征に行き他国の様々な文化や環境を知り得た。日本はまだ治安は良い方だが、まだまだ平和とは言えない国も多々あるのが現状だ。現在、世界では今だに戦争をしている。日本が直接戦争に関与する事は無いものの、「死」は我々にとっても身近なところに存在する現実的な問題となっている。古来より戦士は戦場に身を置き、常に死と隣り合わせであった。そして東西の別無く戦士たちは恐れに打ち勝ち、勇敢に戦い、相手に勝利することが最上の任務であり、名誉であり、それを望んだ。それは日本においても同様であり、我が国では戦士を「武士」又は「侍」と呼んだ。

第１章　『葉隠』に見る武士の死生観

第１章では資料として『葉隠』を用い、武士の死生観を分析したい。まずはじめに『葉隠』の成立事情に言及し、その後その内容を考察した上でその死生観を検証する。これらの内容を順を追って理解することにより、『葉隠』における武士の死生観をより正確に把握できると考える。

第１節　『葉隠』の成立

古川哲史著の『葉隠の世界』において。「『葉隠』は正確には『葉隠聞書』もしくは『聞書』といい、旧佐賀藩士山本常朝を口述者、田代陣基を筆録者として、宝永七年（１７１０）から享保元年（１７１６）の間に隠棲後の山基常朝の談話を筆録し、成立した聞書うぃ中核として、その他常朝以外の多数人士の聞書や古記録類を加えて編纂されたものとされている。『葉隠』の由来は定かではないが、書中に隠し奉公・陰徳の心がけなどが強調される事からこれらの『献身』に本質的由来があると言われている 」とある。

第２章 西洋騎士文学に見る死生観

第２章では資料として『アーサー王の死』を用い、中世騎士文学における騎士の死生観を分析したい。まず、はじめに中世西洋騎士の基本的特徴に言及し、その後『アーサー王の死』と順を追ってその死生観を検証する。他のいくつかの騎士文学に関しても分析したが、その中では死生観に関する叙述が少ないため、本稿ではこの作品に限定して考察した。

第１節 中世西洋騎士の基本的特徴

騎士とは中世ヨーロッパにおける戦士階級の一般的呼称であり、ドイツ語ではRitter、フランス語ではChevalierというが、それはいずれも「乗馬の人」を意味したことばであり、歩兵は含まれない。騎士たちはひとたび戦時となると、鎖帷子と兜に身を包み、腰に剣、右手に槍、左手に盾と手綱をにぎって馬上の人となった。

結論

本論文では二章に渡って、『葉隠』に見る日本

の武士の死生観、『アーサー王の死』に見る中世西洋騎士の死生観について検証してきた。『葉隠』においては治世における武士の死に様と、奉公人としてあるべき姿が曲者や諫言、追腹、死狂いなど様々な形で描かれている。そして騎士文学の中では理想的な騎士のあるべき姿、死との向き合い方が描かれていた。そのどちらにも共通して言える事は、全ての人間に必ず訪れる死と、その恐怖を、登場する人物が克服し、乗り越え、精神的な強さを我が物としようとしていることである。